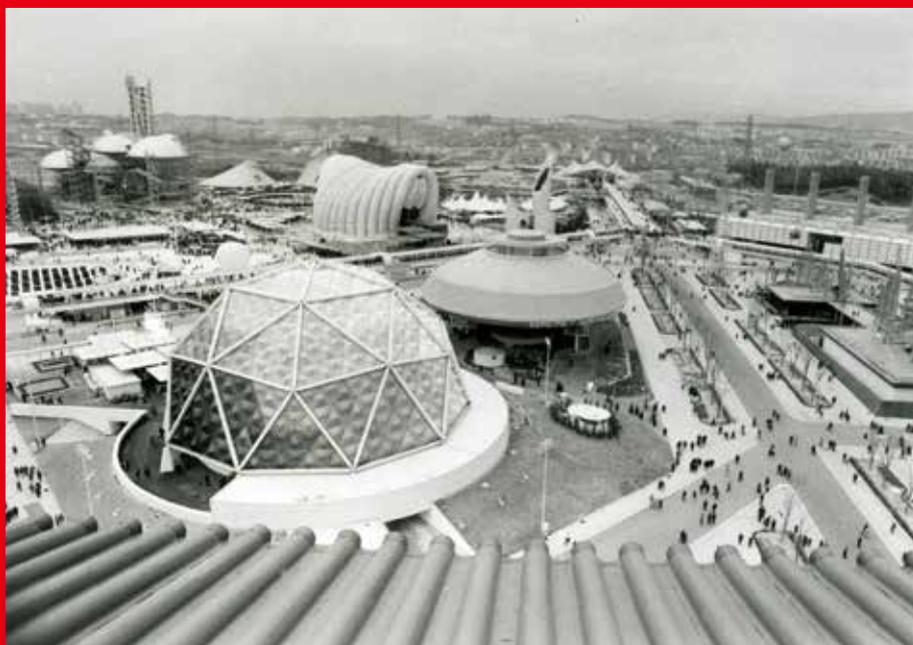




大阪・関西万博開催記念 令和7年度春季特別展
(2025年度)

戦後日本の博覧会 —70年万博から55年—

会期: 4月26日(土)～6月1日(日)



70年万博会場風景(野口昭雄氏撮影)

国際博覧会(万博)は複数の国が条約にもとづいて実施する世界最大級のイベントです。大阪では1970年に当市の千里丘陵で開かれ、55年後の本年、ふたたび4月13日から10月13日まで大阪湾内の夢洲で開催されます。

本展示は、「戦後日本の博覧会—70年万博から55年—」と銘打ち、アジア初の大阪万博をはじめ、沖縄海洋博(1975～76)、つくば科学万博(1985)、花の万博(1990)、愛・地球博(2005)、さらには全国各地の主要な地方博覧会を紹介するものです。展示のねらいは、①戦後の復興と博覧会、②高度成長時代の大阪万博、③地方博ブームと地域振興、④大阪万博後の4つの万博について、歴史的にふりかえることです。

来たる大阪・関西万博は「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマに掲げています。「いのち」を大切にする持続可能な未来社会について、世界各国のさまざまなアイデアや取り組みが開陳されることでしょう。その万博を記念して本展示は企画されました。ご来館をお待ち申し上げます。
(当館特別館長 中牧弘允)

もうひとつの万博 —ハンパクという祭典—

はじめに

昭和45年（1970）に、大阪吹田の地で日本万国博覧会（大阪万博）が開催されました。「人類の進歩と調和」というテーマの下で、日本政府や企業、各国政府が中心となり、斬新な形状のパビリオンを建設し、最新の映像や音響、展示などを駆使して観客を魅了しました。その結果、約6,421万人という入場者数を得て、盛況のうちに幕を閉じました。

その一方で、大阪万博開催の半年前である昭和44年（1969）8月に、「反戦のための万国博」（通称：ハンパク）という祭典が大阪城公園で開催されています。この祭典は、大阪万博が日米安全保障条約の自動延長を覆い隠す国家イベントであるとの批判を前面に打ち出していました。実際は単純な反対運動とは異なる様相を呈していました。そこで本稿では、大阪万博が開催された時代背景を考える一例として、ハンパクの実態を紹介します。

1. ハンパクの始まりと理念

1960年代後半はベトナム反戦運動の盛り上がりと同時に公害訴訟や日米安全保障条約の自動延長といった問題が議論されていた時期であり、大阪万博の開催もその延長線上にありました。ハンパクの計画が持ち上がったのは、昭和44年（1969年）2月ごろで「ベトナムに平和を！市民連合」（ベ平連）の一団体であった南大阪ベ平連の若者たちが大阪万博に対して、反戦の立場からの真の文化を対置しようと考えたのが発端でした。後に関西ベ平連や東京ベ平連でも検討され、桃山学院大学社会学部教授の山田宗睦むねむつが代表となる反戦万国博協会（略称：反博協会）が結成されました。

では、ハンパクとはどのような理念で計画されたのか、広報誌『ハンパクニュース』（No.1）の論稿を確認してみます。まず、山田宗睦「行動と知性の記念像を！」では、大阪万博を「現代という時代、現代世界」をテレビや都市デザイン、コンピュータといった「人知、技術の最尖端から



『ハンパクニュース』（No.1）（桃山学院史料室蔵）

とらえようという試み」として捉え、そこには人民が不在であることを指摘しています。そして、この点において万国博に賛成できないと表明し、ハンパクでは「在地人民の眼で世界をみる立場」から、市民自由大学や討論会、展示企画を実施し、積極的な万国博批判を展開したいと訴えています。ここでは、大阪万博とは異なる人民の視点を重視する姿勢が伺えます。

また、「大衆とは？そのすさまじいエネルギー」（無記名、同上No.3）では、ハンパクと大衆を結びつける言論を展開しています。「右翼も左翼もヤクザもサラリーマンもヒッピーもブルジョワも、オツサンママもオバハンもとにかくこの世にいろんな人間、大衆が存在している」と大衆の多様性に触れ、ハンパクは「大衆のメチャクチャさアナーキーさ、デタラメさ」を結集することを目指すと述べています。そのため、「ハンパク企画部は一切の制限を加えない。やりたいことと面白いことは何でも受入れる」という自由な方針を打ち出していました。

2. ハンパクでは何が表現されたのか

ハンパクは「人類の平和と解放のために」というテーマの下、200以上の団体が参加し、8月7日から11日の5日間にわたって開催されました。

会場となった大阪城公園にはシンボル・タワーが建てられ、その周辺に展示館や演劇会場、フォークソング会場、売店、食堂、約1000人を収容できる宿泊テントなどが設置され、安保問題や沖縄の基地問題に関する展示も行われました。なかでも全国のハンセン病患者から集めた約800枚のハガキを小屋の壁に張り出して、隔離政策によって生み出された差別に苦しむハンセン病患者の声を展示した「らいの家」、教育制度と労働の狭間で苦悩する学生の実態を展示した「夜間中学生のテント」、昭和43年（1968）6月に九州大学構内に墜落した「米軍機 RF-4Cファントム偵察機の残骸」の展示などは話題を集めました。

また、会場で目立ったのが各所で自然発生的に行われていた討論会でした。市民大学会場や劇場、フォークソング会場などのいたるところで、観客や聴衆、出演者が直接対話を行っていたといえます。

開催期間中には、制限を設けないが故に様々

な衝突や批判が発生しましたが、最終的には60,000人以上が参加する祭典となりました。

おわりに

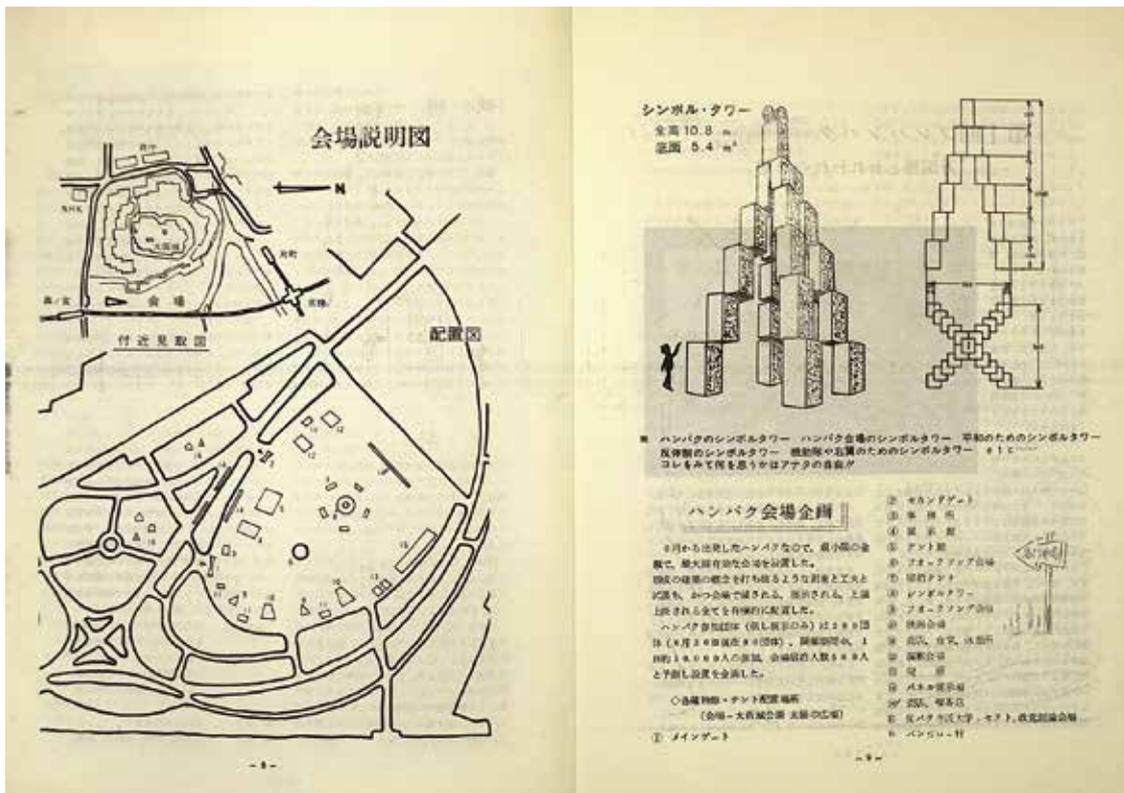
ハンパクは、万博反対という看板を掲げていましたが、実際には展示や芸術活動、討論を通じて1960年代後半の日本が抱える社会問題を参加者で共有し、議論する試みでもありました。ハンパクは、大阪万博の影に隠れてあまり注目されてきませんでした。当該期の人々が万博をどのように考え、向き合っていたのかが伺える一例といえるでしょう。

【主要参考文献】

- ・乾健一「ハンパクー反戦のための万国博一」（橋爪節也他編 『EXPO'70大阪万博の記憶とアート』大阪大学出版会、2021）
- ・針生一郎「反博一反戦運動の試行錯誤」『現代の眼』10月号、現代評論社、1969、126～135頁

※本稿では、今日の人権感覚に照らして不適切と思われる表現も含まれますが、当時の時代背景を考慮して原文のままにしています。

（当館学芸員 藤田裕介）



「会場説明図」『ハンパクニュース』No.3.8～9頁(桃山学院史料室蔵)



令和7年（2025）1月17日、万博グッズコレクターの白井達郎さんのご自宅で大阪万博との出会いやコレクションについてお話を伺いました。



白井 達郎（しらい たつお）

昭和29年（1954）生まれ。大阪府池田市在住。万博グッズコレクター。小学生の時から大阪万博グッズの収集をはじめ。退職後はエキスポカフェを経営。後に万博ミュージアムを開館（現在、閉館中）。

中牧：今日は、万博グッズを収集されてきた白井さんに大阪万博との出会いやコレクションを始めたきっかけなどをお伺いしたいと思います。万博にはまるきっかけは何だったんですか。

白井：実はですね。自宅前の池田市立呉服(くれは)小学校が開会式のパレードをした学校なんです。お祭り広場で。赤い服着てね。記録映画に載ってます。なんでそんなことになったのかと言いますと1966年に万博開催が決定して、その直後にシンボルマークが決まったんです。そして、このマークを西宮球場のパレードで再現したんです。それが2000人吹奏楽の第6回目です。これが非常に良かった。それが私が大阪市内から池田市へ引っ越してきたタイミングでした。万博開幕から4年前ですね。大阪市内ではまだ万博という雰囲気はなかったんですが、池田へ来たら、もう万博です。

中牧：なるほどねえ。

白井：これに参加した楽団が、万博開催中には3



第6回2000人の吹奏楽・西宮球場（白井氏蔵）

日に1回はイベントに出演する状況でした。池田市の方もそれをきっかけとして音楽の街にしようということで各小中学校に吹奏楽部とか楽団を作ったんですよ。これで万博に興味を持って、新聞切り抜きとか始めて、そのうちに新御堂や阪神高速の開通なんかを自分の目で見てまわったんです。チャリンコ乗ってね。工事中の現場に行ってパビリオンを建てているところを見たりしました。そのうちに少年マガジンやサンデーのようなグラビア誌に万博が掲載されるようになりまして、それを買い集めて、頭の中に叩き込んでいくという作業をやってました。その後、中学を卒業して、高校入るまでの間のちょっと長い春休みが、万博の開幕なんです。行きやすい状況だったんですよ。

中牧：春休みだったんですね。

白井：1970年は15歳です。高校に入りまして、その間にも結構万博一人で行きました。高校は桜塚高校といって岡町の近くで、校区内に万博会場があり、その前に友達がおるような状態のところだったので、万博の話題で持ちきりでした。それで夏休みはアルバイトしようと。ただ、アルバイトといたって当時は、アルバイトニュースのような媒体がなかったんです。新聞の片隅に、パートアルバイト募集期間中とかそんな感じだったので、どうしようかなと言ってる間に、ちょうど従兄弟が大学生で、合宿費を稼ぎに万博でアルバイ

トしてたんですよ。7月まではアルバイトして、8月は信州の方に行くから、その後の分やってくれと言ってきて、これは渡りに舟ということで、夏休み8月いっぱいアルバイトしました。

中牧：どんなところでアルバイトをされたんですか。

白井：よく聞かれるんですけども、水中レストランというところでして、海の中でご飯食べるようなイメージです。河合楽器から提供されたグランドピアノが置かれてました。キックマンが運営してたんで、マンズワインのワインセラーがあって、水面を表すような波の天井がありました。ここは魚が泳いでいて、淡水魚と海水魚の水槽があって、それを眺めながら食事ができた。



水中レストラン絵葉書（白井氏蔵）

中牧：水中レストランって、すごいおしゃれですね。

白井：私らは高校生だったんで、ディナータイムだけのアルバイトでした。でもパスがもらえてるので、朝から万博に行って、自由に見て回る。夕方からアルバイトに入って、閉館する1時間くらい前まで働きました。まかないもついてました。

中牧：万博は夜間の部もありましたね。

白井：そうです。これが8月いっぱい。その間にパビリオン全館を制覇しました。

中牧：万博グッズはいつから集めだしたのですか。

白井：友達がアルバイトしているお土産物屋があって、そこに遊びに行ったら、もういっぱいグッズを売ってました。それを見て、すごいと思ったのが最初ですね。ただ、高くとても買える値段ではなかったです。集めたかったんですけど集められず、ただ万博が終わってから安売りされました。

中牧：そこから万博グッズの収集がはじまった。

白井：そうですね。万博が終わってから学生とかサラリーマンの万博グッズを集める会があったんですよ。そういうところに参加させてもらったから、結構あちこちに見つけてきはるんですよ。それを譲ってもらった。後に会場内でお土産屋を経営されていた方に聞いたのですが、売れ残った万博グッズは、パビリオンなどを解体する業者に持って帰ってもらったと。そういったものが結構流れてきて、私ももらいました。他にも商店街とか歩いて、普通の雑貨屋さんに鍋にマークの入ったものとか、服でもマークの入ったものが安く売ってたんで集め出したんですよ。

中牧：なるほど。

白井：切手とかコインは、すでにカタログが出るんですけども、万博グッズはカタログも何もないと。誰に聞いても何が出るか分からない、というようなことを聞いたんで、後付けの話になりますけど、最後は自分でカタログを作ったのが、『EXPO'70グッズコレクション』という本なんです。それは約1300点くらい掲載しました。

中牧：池田の呉服小学校が縁で万博への関心が高くなったと。

白井：ですから他の小学校行ったら、そこまで関心を持ってないと思いますね。

中牧：開会式は見に行ったんですか。

白井：開会式はね、一般の人でなくて抽選でないと入れなかったもので見に行っていないです。まず何を集めたかということ、初日にばらまいた紙吹雪の残りを拾うとか、パンフレットは全部集めたら

うということで、そこからスタートです。集めるのが好きなんです。もともと好きだとか。

中牧：切手とかコインのコレクターはいるけれど、万博グッズっていうのは珍しい。

白井：そうですね。こんなんやってるの世界で日本で自分だけやなくてずっと思っていましたね。でも当時はね、特に吹田の方は、結構集めてる人多かったみたいです。これは後に知ったんですけど、EXPO'70パビリオンにいと、写真を持ってきて万博の話をする人がいるんですよ。写真に万博グッズがいっぱい並んでてね。これを譲ってくださいって言ったら、いやこれ捨てましたと。ちょっと待ってください。はあーって力抜けますよね。

中牧：コレクターっていうのは大変なんだ。仲間はいたんですか。

白井：仲間はいました。その当時大学生ぐらいで、集めるのが好きな人で。私より年上の方が集めてましたね。手に入りやすいグッズなどは結構最初の方に集めてしまったんです。あと四天王寺の骨董市に何回も行きました。私が勤めていた会社が四天王寺の近くだったので、骨董市の日は早朝から出てかけまして、他に買う人いないからね。当時はみんな私のことを覚えてくれて、段ボールいっぱい選んだらこれ全部で3000円とか、そんな感じでした。

中牧：すごいですね。



クリアファイルに閉じられた万博コレクション

白井：あと、仕事で出張に行くんですが、例えば金曜日の出張やったら、自腹で一泊するんですよ。それで地元の古物屋さんとか、古書店とかレコード屋さんに出向いて探してました。

中牧：それである段階から今度はお店を営んで、カフェをしたんですか。

白井：49歳で会社をやめました。万博に関わった方の知り合いができたんですよ。アート関係の仕事もしてたんです。その時、大高猛先生（編者注:日本万国博覧会アートディレクター）とも知り合った。

中牧：何の会社ですか。

白井：印刷会社なんですけど。私はデザイナーさんの担当もやったんですよ。皆さんからいろいろお話を聞く。皆さんもぼちぼち引退する年頃。資料を頂いたり、お話を聞いたりしました。ポスター一枚にしても苦労話がある。どこにも出てない話をいっぱい聞いたんですよ。それで深入りしようと思ったんですよ。それでとりあえずは料理の学校に行って、エキスポカフェを始めたんです。オープンからすごく話題になってNHKが生放送してくれたり、店を辞める時は新聞社がいっぱい来てね。入るのに2時間待ちという状態でした。人気だったんですが天満橋に開いたので、サラリーマンたちの店になってしましまして。私は好きな人だけでゆっくりとやりたかったんですけど、時間に追われて、ちょっとこれは違うなっていうのもあったんで、4年ぐらいでやめました。その頃からですね、展示の依頼とかは来ていたんです。店を休みながらも展示などをしていたんですけども、2000年以降は万博の方のお仕事もいただけるようになって、今まで続いています。

中牧：そうなんですか。

白井：自宅のウルグアイ館ですけども、これ2002年に持ってきたんです。もともと1990年頃から公式記録に載っているパビリオン移設先ページがありまして、それを追っかけてたんですよ。ほとんど残っていないんですが、兵庫県氷上町（現丹波市）にウルグアイ館がラーメン屋として

残っていたんですよ。そこに何回か通ってたんですけど、オーナーさんが古びてきたから潰したいと。そこで譲ってくださいとなりまして自宅に移設しました。そうすると話題になるんですね。テレビなどの取材がきました。そこから数年間は自宅をミュージアムにして、見てもらうようなことをやっていたんです。

中牧：確かにそうでしたね。

白井：ただ年とともに、それもしんどくなってきて、今は展示などの貸出しをメインにやっております。

中牧：万博の遺産を考えると、コレクションというのは大事ですね。

白井：博物館では、例えば山田様、何日寄贈みたいに個人別に置かれるじゃないですか。でも合わせてみたら全部同じ資料っていうのがあるんですよ。これは私としては良くないような気がする。パピロンごとに保存していくのが絶対必要だと思います。松下館のパンフレットでも表紙が一緒と思ったら違うんです。木の生え方が違ったり、写っているホステスの人が違ったりする。研究対象になりますよね。どこが変わったっていうのを比べると面白いです。ガイドブックでも国内版と英語版、フランス語版があります。例えばナショナルの広告の国内版は木目のテレビの写真で、海外向けはプラスチックなんです。そういうカッコいい感じの未来チックな写真が並んでたりする。そういう研究とかも面白いかなと思います。

中牧：今回の万博への取り組みはどんなふうにご考えておられますか。

白井：私自身はあえてお客さんの立場で行く。ボランティアは一切考えてません。体のこともあるし、人生最初と最後で楽しもうというのが計画でございまして、例えば1日目は三菱未来館に行って没入空間で楽しみ、次には韓国館で辛いもん食べる。iPS心臓を見て、また人間洗濯機を見る。一般見学者として見たいなど。



貸出しのために整理されたコレクション

中牧：万博は一粒で二度おいしいっていう感じですか。

白井：70年万博をオマージュしたようなパピロンもありますしね。

中牧：大阪の人にとっては人生に二度楽しめるわけですね。コレクションは続けないのですか。

白井：もうしないです。楽しむだけ。いま一生懸命、コレクションを減らしてるところなんです。

中牧：次の後継者の育成とか、そんなことは考えてないですか。

白井：そういった方は少ないんですよ。でもね、ガイドをしてくれる人はその時代に生きてない人でもやっていますからね。知識を持って間違いないことを伝えてもらえたらいいと思うんですよ。

中牧：70年万博の生き字引きみたいな役割を果たしておられますね。

白井：できるだけ後世には伝えたいというふうにはやっています。

中牧：25年万博でもいろんなお役が回ってくると思いますが、貸出しだけで済むかどうか。これからますますお忙しくなるとは思いますけれども、本日はありがとうございました。

大阪・関西万博開催記念 令和7年度(2025年度) 春季特別展 「戦後日本の博覧会—70年万博から55年—」 関連イベント

開会式&展示解説 ※無料観覧日

- ◆ 4月26日(土) 午後1時～2時
場所：3階 ロビー及び特別展示室

講演会

場所：2階 講座室 定員：先着120名

- ① 4月26日(土) 午後2時30分～4時
「万国博覧会とアート —映像と音響の祭典
EXPO'70 大阪万博の記憶—」
講師：橋爪節也氏(大阪大学名誉教授)
- ② 5月11日(日) 午後2時～3時30分
「万国博覧会をかけた支えた人たち
—乃村工藝社を事例に—」
講師：石川敦子氏(株式会社乃村工藝社
博覧会資料担当学芸員)
- ③ 5月25日(日) 午後2時～3時30分
「沖縄国際海洋博覧会と沖縄観光」
講師：神田孝治氏(立命館大学教授)
- ④ 5月31日(土) 午後2時～3時30分
「『共創の場』としての共同館
—2025年大阪・関西万博の試みをふりかえる」
講師：吉田憲司氏(国立民族学博物館長
(4月1日から同館名誉教授就任予定))

歴史講座

- 場所：2階 講座室 定員：先着120名
5月17日(土) 午後2時～3時30分
歴史講座「戦後日本と博覧会の歴史」
講師：藤田裕介(当館学芸員)

ギャラリートーク ※無料観覧日

- 場所：3階 特別展示室
5月18日(日) 午後2時～3時
講師：中牧弘允(当館特別館長)

展示解説 ※要観覧料

- 場所：3階 特別展示室
5月24日(土) 午後2時～3時
解説：藤田裕介(当館学芸員)

クイズラリー

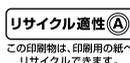
- 場所：3階 特別展示室 時間：午後1時30分～3時
4月27日(日)、5月10日(土)
5月17日(土、無料観覧日)、5月25日(日)
5月31日(土)



【交通案内】

◆ JR 岸辺駅下車北口から徒歩 20 分 ◆ JR 吹田駅北口・阪急吹田駅から一千里中央ゆきバス 4 系統「紫金山公園前」下車徒歩 5 分 / 五月が丘南ゆきバス(循環)「五月が丘西」下車徒歩 7 分 / 桃山台駅前ゆきバス「佐井寺北」下車徒歩 10 分 ◆ 阪急南千里駅から一千里中央ゆきバス「佐井寺北」下車徒歩 10 分 ◆ 北大阪急行千里中央駅・阪急山田駅から一千里中央ゆきバス 4 系統「紫金山公園前」下車徒歩 5 分 / JR 吹田ゆきバス 12 系統「岸部」下車徒歩 10 分 ◆ お車の場合は、五月が丘方面からお回りください。(吉志部神社方面からは車は侵入できません。) ◆ 道路案内では博物館駐車場前の「吹田市立佐井寺中学校」を目的地に設定してください。

吹田市立博物館だより 第101号 令和7年(2025年)3月31日発行
編集・発行：吹田市立博物館 〒564-0001 吹田市岸部北4丁目10番1号 TEL 06(6338)5500 FAX 06(6338)9886
ホームページ <https://www.city.suita.osaka.jp/museum/>



この冊子は2,000部作成し、1部あたりの単価は45円です。
森林認証紙と植物油インキを使用しています。